

キャリア教育に関する研究

—小・中・高等学校の連携を目指して—

高知県立大方高等学校 教諭 中村佳子

現在、自分の進む道が分からない子ども達の増加や、立ち直る力の弱い子ども達の増加が問題となっている。高等学校教員として、このような子ども達に何が必要なのか、何が大切なのか、また一体何をすべきか苦心している現実がある。

児童生徒一人一人の自分自身への気づきや自信、そしてやる気を引き出し、生きる力を育むためには、キャリア教育の観点に立った教育活動が必要であると考え。発達段階に応じて系統だったキャリア教育を進めていくために、小・中・高等学校を通して一貫した指導目標を示す。そして児童生徒一人一人がそれぞれの発達段階でどのような力を身につけているのかを確認していくための、3つのツールを作成した。

キーワード：キャリア教育、小・中・高等学校の連携、発達段階、一貫した指導目標、客観性

1 はじめに

一人一人が自分にあった生き方ができるように、必要な意欲や態度、能力を育てる教育であるキャリア教育は、職業教育でも進路指導の新しい呼び名でもない。自分で自分の道を選択できる力、そしてその選択した場所にきちんと適応していける力を身につけることが、キャリア教育の考え方である。また職場体験活動を行うことで、学校では出来ない体験をすることや、社会について知ることがキャリア教育そのものではなく、それらを通じて自分自身を理解したり発見したりしながら、子ども自身が成長すること、そしてその身につけた力を授業や学校で生かし伸ばしていくことがキャリア教育である。

キャリア教育の基本ベースは生き方の教育であり、学校教育におけるキャリア教育とは、学校全ての教育活動を通して推進していくものである。そのため各学校は、できるだけ早い段階から、児童生徒の発達段階に応じて一貫した教育活動を継続して展開していくことが必要である。このことよりキャリア教育は高等学校だけで行われるものではなく、できるだけ早い段階から発達段階に応じて進めていかなければならないと考えるが、現段階では上手く校種間の連携ができていないように考えられる。そこで、小中高と次の段階に上手く移行できるような連携のあり方を考えてみた。またキャリア形成を進めていく中で、児童生徒に育んでいく力を示し、身につけた力を客観的に確認できるツールがあればいいのではないかと考えた。発達段階に応じた指導目標を示した上で、学校現場において実際に使用できるものを作成したいと考えた。

小中高の連携を課題として研究を進めていくにあたって、以下の3つにポイントを絞った。

まず一つに、発達段階に応じて系統性のあるものであること。二つ目に、子ども達の持っている力を客観的に確認できるものであること。三つ目に学校で使えるものであることである。

以上のポイントから、小学校から高等学校まで発達段階に応じた指導目標が一目で分かる、キャリア教育に関する「リーフレット」の作成。現在の自分を知り、今後の進むべき方向を見定めることに役立つ、児童生徒自身が作成する「キャリアシート」の作成。児童生徒理解のための方法として担当教員が記し、一人ひとりの児童生徒に関わっていく教員全員で引き継いでいく「キャリアパスポート」。以上3点の作成を計画した。

2 研究目的（研究仮説など）

キャリア教育に関するリーフレット、キャリアパスポート、キャリアシートを継続して活用するこ

とによって、発達段階に応じた、なおかつ小中高との連携をとったキャリア教育を行うことにより、児童生徒は自らの意思と責任で進路を選択決定することができるのではないかと。

3 研究内容

(1) 基礎研究

進路指導の現状把握及び諸課題に関する研究

現在、高校で進路を決められないまま卒業をしていく生徒の増加、また就職後の早期離職者の増加が問題となっている。このような現状の中、高等学校の教員として何をすべきか苦心している現実がある。いわゆる出口指導ではなく、生徒一人一人が自分自身への気づきや自信、そしてやる気を引き出し、生きる力を育むことが課題であるとする。

ア 学校から社会への移行をめぐる問題

(ア) 進路を決められないまま卒業していく生徒（平成 17 年度卒業生：学校基本調査）

表 1 は昨年の 3 月に全国の中学校、高校、短大、大学を卒業した生徒・学生の統計である。全校種の卒業生約 300 万人のうち、5.7%の約 17 万人が学校を卒業していながら、進学も就職もしていない状況である。高校では 5.7%の約 6 万 6 千人である。短大、大学と進むとますますその割合は大きくなっている現状があり、大きな問題であるとする。

(イ) 早期離職者の増加（図 1 参照）

図 1 に示したとおり、若者の早期離職は、就職して 3 年以内に辞める割合が中学卒は 7 割、高校卒は 5 割、大学卒で 3 割とされることから、「七五三現象」と言われている。特に中卒者の場合、卒業から 1 年以内に離職する率が高く、高知県では更に全国を上回る離職となっていることが問題である。

(ウ) 旧態依然とした進路指導

本来、進路指導は生徒が自らの生き方を考え、将来に対する目的意識を持ち、自らの意思と責任で進路を選択決定する能力や態度を身に付けることができるよう、指導・援助することである。したがってキャリア教育との間に大きな違いはなく、むしろ進路指導の取り組みは、キャリア教育の中核をなすということができる。しかし、これまでの進路指導では、どちらかといえば

学力中心のいわゆる出口指導に偏りがちであった。また働き、自立するための主体性を育てるために、どんな知識や能力をどのように教師が支援していけばいいのか、今まで明らかにしてこなかった現状がある。そして子どもの周囲の環境は明らかに変化してきているが、育てる側の手立て・意識が変化していないことも問題であるとする。

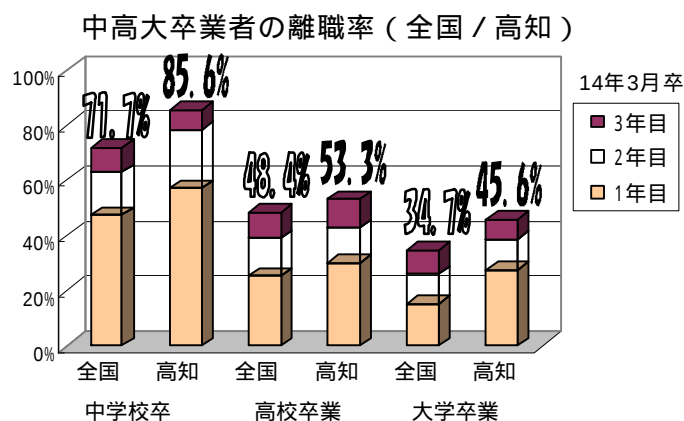
イ 子ども達の生活・意識の変容

(ア) 直接体験や異年齢者との交流の場の減少

子ども達は、自分の成長や発達を支える上で、欠かすことができない異年齢者等との多様で幅広い人間関係を得ることができない。また、大人が仕事をしている姿や、生き生きと生

【表 1 全国の中・高・短・大の卒業生の状況】

	卒業生数	就職も進学もしなかった生徒の割合	実数
中学校	1,211,242	1.2%	14,457
高校	1,171,501	5.7%	66,364
短大	99,611	11.9%	11,899
大学	558,184	14.7%	82,009
合計	3,040,538	5.7%	174,729



【図 1 中高大卒業生の離職率（全国 / 高知）】

活している大人を生で見る機会が減ってきているため、「こんな風になりたい」といった、モデルとすべき生き方を見つけにくい状況に置かれている。

(イ) 進路を選ぼうとしない子どもの増加

子ども達は実際にやりたいことを持っていて、自分にはできないかもしれないと諦めてしまう子ども達、真剣に考えすぎて一步が踏み出せずに立ち止まってしまう子ども達、自分らしく生きなければという思いがプレッシャーに変わっている子ども達、過去の嫌な経験が心に残っていて、不安や恐れを抱いている子ども達、あるいは本当に何をして良いのか分からないという子ども達など、進路を選ぼうとしないのではなく、選べない子ども達が沢山いる現状がある。

(ウ) 「とりあえず」進学する子どもの増加

人間関係を築くのが苦手、自分で意思決定できない、自己肯定感をもてない、将来に希望を持つことができない、といった子どもが増えつつあることが指摘されている。

キャリア教育に関する研究

「キャリア」や「キャリア教育」という言葉は広く知れ渡ってきているが、その意味や受け止め方は多様で共通理解がなされていない現状がある。「キャリア (Career)」の語源は Carry にあると言われており、Carry には、ものを身につけて持ち歩く、携帯するという意味、そして轍(わだち)等という意味が含まれている。前者は、人間が生まれてから身に付けてきた様々なものや、その人の生き方全てがその人のキャリアであると解することができ、キャリアを人生で自分が持ち運ぶカバンの中に詰められた自分の生き方であると考えると分かり易い。後者の轍とは、車が通って道に残した輪の跡のことであり、自分がどういう道を歩いてきて、これからどんな道を歩いて行くのかということである。このことより、子ども達にとってのキャリアとは経験を積み重ねることであると言える。

キャリア教育とは、一人一人が自分にあった生き方ができるように、必要な意欲や態度、能力を育てる教育であり、そのために人生経験や社会経験を積み重ねていく教育である。キャリア教育とは教育の目指す方向のことであり、新しく別の何かを始めたり職業体験をしたりといったような、特定の教育活動をするだけのことではない。今まで行ってきた教育活動の全てをキャリア教育の観点で見直すことである。

また、キャリア教育は高等学校だけで行われるものではなく、できるだけ早い段階からそれぞれの発達段階に応じて進めていかなければならない。そして現在、それぞれの段階でバラバラに行われているものを系統化させ、連続性をもって一つずつ力を積み上げていくことが肝心であると考えます。

(2) 実態調査

ハローワーク、ジョブカフェでの聞き取り調査

「OHBY」や「キャリア・インサイト」といったコンピュータによる若者向けキャリアガイダンス(職業適性診断)・システムなどにより、自己理解の促進や職業意識の啓発など、適職について知りたいという若者のニーズにすぐに応えられるシステムが活用されている。将来を考えるきっかけ作りの一つとして活用できる。また卒業後など必要な時に、子ども達がハローワークやジョブカフェを抵抗なく利用するためにも、在学中にジョブカフェやハローワークに足を運び、見学や体験をすることが必要である。

また、子ども達の話が家庭や学校でじっくりと聞いていないために、子ども達の中には自分達の話聞いてくれる場として訪れる者もいた。子ども達の身近にいる大人がじっくりと話を聞くことなど、子ども達への関わり方や支援のあり方を考えさせられた。

各種会への参加

生徒たちに就職する意欲が無い、能力以上に要求が高い、成績不振等の理由のため何のアクシ

ョンも起していない、一度は受験をしたが不合格になった後は活動をしようとしなない等、子ども達に対して沢山の問題が出されている。これらの課題は特定された人々だけの課題ではなく、生徒と保護者、ホーム担任、進路部を始め教職員全員、そして就職アドバイザー等それぞれが問題を共有して連携しあいながら、一人一人の生徒に関わっていくことが肝心である。

また、学校関係以外の多くの方たちが高校生のために様々なセミナー等を企画し、沢山のお金をかけて、沢山の支援をしているにもかかわらず、学校がそれらを上手く活用できていない、あるいは活用しようとしていない面が見られた。メニューは沢山用意されているため、我々教員がやる決断をし、行動をしていくことが、生徒達にとって沢山の考える機会や多くの挑戦、そして体験するチャンスを作っていくことに繋がるだろう。

各学校や事業所訪問

教員が実際に足を運び、それぞれの事業所で働く人の姿を見て、職場の雰囲気や直に感じることや、職場の方から直接話を聴くことの重大さを改めて感じた。各学校での様々な授業や事業所訪問をさせていただく中で、教師の仕事はこれから社会に出て行く子ども達と実社会とをいかに結びつけ、しっかりと橋渡ししていくかという重要な役割をしている事を痛感した。教師自身が社会で何が求められているのかを知ること、そして社会に出て生きていくための力をどのように子ども達につけていくのか、それぞれの学校にあった方法を考え実施していかなければならない。

県内外の学校訪問では、学校の雰囲気や研修会等へ参加される先生方の姿勢、子ども達に向かう熱意、そして現状をどうにかして変えなければ、という先生方の想いに温度差を感じた。

ある学校では、生徒一人一人を見抜いて本人に合った情報を与え、意欲を持って自ら行動できるように支援している先生に出会った。また別の学校ではキャリア教育といっても、短期間で集中的な取り組みが行われることが多い中、日々継続して行われている授業の中で、学校の全教員で年間を通して取り組みをしている学校を見た。

このような地域や教員が同じ方向を目指した取り組みを、私たち多くの教員が知り、系統立って継続してキャリア教育に取り組み、生徒と向き合っていくことが必要である。今まで「学校は、教師はこうあらねばならない、こうあるべきだ」という狭い見方を、我々教員が取り払わなければならない。目の前の一人一人の子ども達と真剣に向き合う気持ちや、現状のままでダメだと常に問い続けながら、まずは我々大人が変わることが不可欠である。

キャリア教育に関するアンケート調査

ア アンケート調査の目的

基礎研究の部分で明らかになった問題点や課題を考え合わせながら、児童生徒が成長していく過程で育んでいく力を仮定し、その中で現場の先生方が特に必要だと感じている力は何なのかを知るために、アンケート調査を実施した。

児童生徒に育みたい力を大きく4グループに分け、それぞれのグループの中で特に必要だと思う順に、順位をつけてもらうことにより、先生方がより必要としている力を各グループから絞り、それぞれの能力に応じた指導方法や目的を記したリーフレットを作成する。

イ 調査の概要

黒潮町内の小学校9校、中学校2校、高等学校1校の計12校に在職する教職員を対象に、平成18年11月にアンケートを実施した。その結果、小学校83名、中学校37名、高等学校41名から回答を得ることができた。

ウ 調査の結果

(ア) 児童生徒が成長していく過程で特に必要だと考える力について

アンケート結果は自分自身が期待していたものとは違い、生徒にとって、より必要だという力を絞ることができず、4グループのうち3グループはほぼ同等の結果が出てきた。(図2参照) それどころかコメント欄には、「順位を考える意義があるのか」「順位をつけるよう

なことではなく同列であると考えている」というご意見もいただき、どれだけ自分本位にアンケートを作成していたのかを、感じさせられた。アンケートに答える人を見て、何が目的で何が知りたいのかが分かり、疑問を与えない内容になるように考えられていなかった事など、反省の残る結果となった。したがって、極端に意見の少なかった「情報を集める力」を除いた他の力を、リーフレット作成に使用した。

(イ) 他校種との連携に関して（図3参照）

今以上に連携をしていきたいという意見は、約7割いる。それに加えて、現状で充分であると答えた中にも、連携をしたいと思っているが現在の状況では難しいとコメントしている方もいるため、小中高の多くの先生方が、連携の必要性を感じていることが見受けられる。

(ウ) キャリア教育の認識について（図4参照）

キャリア教育の認識については、具体的にどの程度知っているかどうかの問いではないため、あくまで個人的なものさしでの回答ではあるが、高知県ではまだまだキャリア教育についての認識が低いと言える。

(3) 実践研究

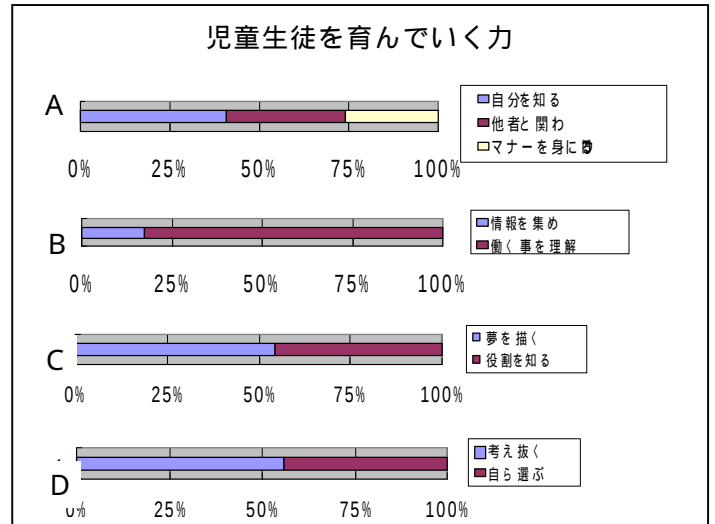
「キャリア教育」のリーフレット作成

ア キャリア教育に関するリーフレット作成の目的

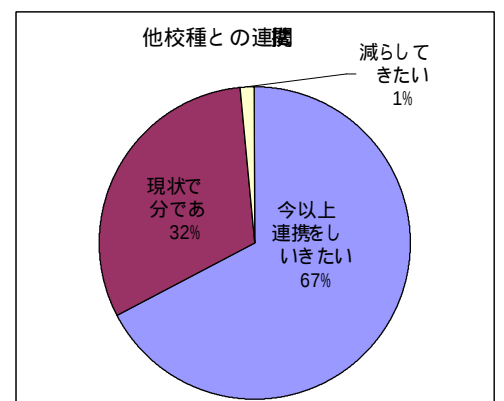
小中高との連携を目指し、発達段階に応じたキャリア教育を行っていくためには、それぞれの段階に応じた「指導目標」が一目で分かるものが必要である。キャリア教育を行うことによって育成される能力として、文部科学省が「4つの領域で8つの能力」を提示しているが、これはあまりにも領域が広く、また一つ一つの能力が複雑であると感じた。そのため、中でも特に育んでいきたい力は何かを研究すること、そして身につける力とその指導目標を、よりシンプルに示すこと、以上の二点に気をつけながら、リーフレットを作成した。

イ 身に付けたい8つの力

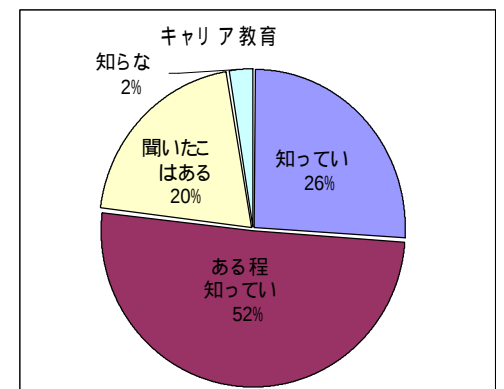
- (ア) 『自分を知る力』自分らしさを知り、自分に何ができるのかを考え、伸ばそうとしていく力。
- (イ) 『他者と関わる力』様々な人々とコミュニケーションを図りながら物事に取り組むことができる力。
- (ウ) 『マナーを身につける力』身だしなみや挨拶ができ、礼儀正しい言葉遣いや行動をしようとする力。



【図2 児童生徒を育んでいく力】



【図3 他校種との連携に関して】



【図4 キャリア教育について】

- (イ) 『働く事を理解する力』働く事に関心を持ち、働く事の大切さ、楽しさ、厳しさなど、働く人々の思いを理解できる力。
- (オ) 『夢を描く力』自分の将来を思い描くことができ、将来の夢や希望の実現に向けて努力することができる力。
- (カ) 『役割を知る力』日常の中に色々な役割があることを知り、状況に応じた自分の役割を理解し、果そうとする力。
- (キ) 『考え抜く力』課題を発見し、課題解決のための計画を立て行動を起こすことができる力。
- (ク) 『自ら選ぶ力』自分にふさわしい、より良い選択・決定を主体的に行い、自分で選んだことに対して責任が持てる力。

「キャリアパスポート」の作成（図5 参照）

ア キャリアパスポート作成の目的

キャリアパスポートは、児童生徒を理解するための方法として、発達段階に応じた指導目標の達成度合いを担当教員が確認していくものである。学校教育全ての教育活動をキャリア教育の観点で見直すためには、我々教員が児童生徒に身につけて欲しい力を常に意識して接することが肝心で、そのためにはそれらの力を確認していくためのツールがあったらいいのではないかと考えた。

これは児童生徒の善し悪しを評価するものではなく、一人一人を客観的に認識し、良い部分を認め、伸ばしていくことに役立てるものである。

イ 8つの力で自分を確認

リーフレットに示した指導目標を基に、その指導目標の達成度合いを記していく。記入方法は、能力別に記載された問いに関して、四段階の中からチェックしていく形とした。

ウ 「ピカイチ」の項目

児童生徒の特に光っていた行動や発言などを1つ記し、それが8つの力のどの力なのかを、キャリア教育の観点で記載する。「ピカイチ」項目への記載の目的は、教員がキャリア教育の観点で生徒を見る意識ができること、そして児童生徒を未来へ引き継ぐために役立つ内容になると考え、記載した。

エ 小学校から高等学校まで引き継ぐ

キャリアパスポートは、小学校1年生から高校3年生まで、12年間分が1冊にまとまっており、これを小学校から高等学校まで順に引き継いでいく。この1冊を引き継いでいくことによって学年や校種を越え、生徒に関わる教員みんなで、一人の生徒を引き継ぎ育てていけるのではないかと考えた。

「キャリアシート」の作成（図6 参照）

ア キャリアシート作成の目的

キャリアシートは、児童生徒が記入していくシートである。これは児童生徒自身が持っている8つの力を確認しながら「現在の自分を知る」こと。そして自分がこの先、どのような生き方をしていきたいのか、どのような大人になりたいのか「将来の自分を考える」こと。さらに、それまでに経験してきたことや頑張ってきたこと、考えてきたことや大切にしたいと思ってきたことなど「過去の自分を振り返る」ことが目的である。

キャリアシートは記入をすることが目的ではなく、自分自身に問いかけたり、振り返ったり、新たに発見したり、考えたり、人に意見を聞いたりしながら、記入にたどり着くまでのその過程が大切で、また記入時に思ったことを日々の生活にいかに関係付けていくのが肝心である。

高校3年生		あてはまる ややあてはまる あまりあてはまらない あてはまらない			
		4	3	2	1
<< 自分を知る力 >>					
①自分の能力を、もっと伸ばしたいと思っている。					
②自分の興味や適性と合わせて、希望進路を考えている。					
③客観的に、自分の長所と短所を説明できる。					

【図5 キャリアパスポート】

更に、キャリアシートを基に面談をすることで、生徒自身も教師も双方に新たな気づきが生まれることも期待される。このようなノートがあれば、担任が変わっても生徒の歩みが、次の担任にも伝えることができるのではないかと考えた。

イ 8つの力で自分を確認

キャリアシートは、8つの力について、それぞれ能力ごとに3つのチェック項目と2つの質問項目の5項目で作られている。発達段階に応じてチェック内容が違い、また質問項目に答えることで、現在の自分を認識して言語化し、今後どうしたいのかを考えられ、また過去の自分を振り返ることに役立つと期待できる。

ウ 1年に2回の記入

シートへの記入は1年に2回、1回目は6月～7月に、2回目は2月～3月に記入をする。1回目の記入は、昨年までの自分自身や生活を振り返るチャンス、また新たな自分に気づき、認識するチャンスとする。2回目の記入は、1回目にした内容と比べ、一年を振り返るチャンス、また心構えを書きとめ、自分の生き方を考えるチャンスにする。

また、8つの力以外に、学年の最後には「挑戦した事」や「忘れたくない出来事」、「なりたい自分」などを書きとめておけるように作成した。

エ 小学校から高等学校まで引き継ぐ

キャリアシートはキャリアパスポートと同様、小学校1年生から高校3年生まで、12年間分が1冊にまとまっており、これを小学校から高等学校まで順に引き継いでいく。保管は担当教員が行うこととする。

【図6 キャリアシート】

4 まとめ

(1) 校種間の連携のあり方

一年間の研究を終え、各学校で利用できるツールは完成したものの、実際にそれらを使用した小・中・高等学校の校種間の連携を具体化させることができないままに終わることとなった。また現場で使用する場合に出てくる、個人情報や予算面、保管条件等の制度的な面、そして校種の違う私が作ったキャリアシートのチェック項目や質問内容、文章表現が、実際に小学生や中学生に沿っているものなのかどうか等、課題が沢山残った。これらは実際に実施していくに当たり、他校種の先生方と検討しながら、地域や子ども達にあったものに変えていく必要がある。

まずは大方高校と隣接している大方中学校と入野小学校とに提案し、小中高の3校で実施することを第一段階だと考えている。またその際、小学校や中学校の先生と一緒に、内容の検討も同時に行っていく必要があると考える。

(2) 成果物はWEBサイトへ掲載をし、誰もがどこからでも取り出せるようにしておく。

(3) 効果の判断

リーフレット等を作成したものの、それらが真に効果のあるものかどうか、長期的に利用しながら検証していくことが課題である。またこれまでに作成したものや得た情報などを積極的に活用しながら発信し、様々な連携を通して共有していく必要がある。

キャリア教育は小中高だけでなく、就学の前や就業した後においても、生涯にわたって展開されるもので、教職員や卒業生へ長期にわたってアンケートを取るなどして、できれば保幼小中高大、そして社会人になった後についても知ることで、真に効果があったかどうかを見ていくことができ

ると考える。

(4) 各機関や家庭・地域等、大人同士の連携

キャリア教育は学校だけでなく、各機関や家庭・地域等、大人同士の連携をはかっていくことが必要である。そのためにも、教師が学校から外へ出て、教師以外の人とふれあい、人との繋がりや社会との繋がりをもっていくことが課題だと考える。学校が外に開き、外部からの意見を意識することが、児童生徒をよりよくしていくことに繋がると考える。

5 最後に

「キャリア教育」とは何か、明確な共通理解がされた上で、それぞれの立場でお互いの役割分担や目指すもの知り、共通する部分を連携しながら進めていくことが必要である。またキャリア教育への取り組み方は色んな方法があるが、大切なのは、子ども達の周囲にいる大人みんなで子ども達に関わっていくことである。また子ども達にどう関わっていくといいのかを話し合いながら、大人みんなで子どもを育てていくことが大切である。そして私たち大人が、子ども達のモデルになるように、失敗や楽しさも含めて真剣に取り組んでいる姿を子ども達に見せ、語っていくことで、子ども達は目の前の大人のいろんな生き方に触れ、輝きながら働いている大人達を見つけられることが肝心である。特に子ども達と身近に接している私達教員が、そのことを強く意識することが、キャリア教育の第一歩だと感じた。

日々の家庭生活や学校生活の中では、つい結果だけで判断してしまうことが多いが、結果にたどり着くまでの工夫や発見、苦労などのプロセスに目を向け、問いかけをしながら考えさせたり話をする機会を作り、声に出して確認しながら、一人一人の子どもを認めていくことが大切である。

生徒に対する様々な考えや想い、キャリア教育を行うための色んな手段・方法があったとしても、それを使わなければ意味を成さず、実行しようとする人がいるかどうかが問題である。この一年に研究して作成したもの、様々なセミナーや講演、学校や事業所訪問等によって得た情報等を学校に持ち帰った時、私自身がコーディネート役として実践していくこと、そして学校を変えていくことが、今後の一番の課題である。

今回のアンケートに関しまして、その質問に至らない内容及び表現等がありました事をお詫び申し上げますとともに、ご協力いただきました各学校の先生方に心から感謝申し上げます。

6 引用・参考文献

- ・ 「自分のキャリアを自分で考えるためのワークブック」小野田博之
- ・ 「就職がこわい」香山リカ 講談社 2004.2
- ・ 「キャリア教育入門」三村隆男
- ・ 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(2004)児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために
- ・ 「キャリア教育の視点を生かした進路指導の工夫・改善に関する参考資料」生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために(中学校・高等学校編)
- ・ 「高校生の採用に関するアンケート」調査結果報告書 高知県経営者協会平成 17 年 1 月
- ・ 「キャリアガイダンス」キャリア論 他 株式会社リクルート
- ・ 「月刊 高校教育」フリーター・ニート問題と高校生 学事出版 2005.6
- ・ 「少子化社会対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について」少子化社会対策会議決定 平成 16 年 12 月
- ・ 「キャリア教育入門」実業之日本社